

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

令和2 年5月10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 iPS細胞研究所

職 名 特定研究員

氏 名 鈴木 美香

助 成 の 種 類	令和元年度 ・ 研究活動推進助成			
申請時の科研費 研究 課 題 名	新技術の適切な利用に関するグランドデザインの構築:ゲノム編集を例に			
上記以外で助成金 を 充 当 した 研 究 内 容	なし			
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名) なし			
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等) Global Forum on Bioethics in Research, Singapore, SGP, November 12, 2019.			
成 果 の 概 要	研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)			
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	1,000,000 円		
	使用した助成金額	1,000,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳	費 目	金 額	
		物品・図書・消耗品費	541,201円	
		学会参加・旅費	340,089円	
その他通信費		118,710円		
当財団の助成に つ い て	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 科研費が不採択となり、研究継続が困難になるかもしれない中、貴財団による助成をいただき、継続して研究を進めることができました。本研究内容を発展させる形で、次年度の科研費申請を行った結果、採択につなげることもできました。当助成金は、ボトムアップ研究費として自由な発想に基づき使用できる点でも貴重なものだと感じます。改めて、この度の助成に感謝申し上げます。			

## 成果の概要／鈴木美香

### 研究内容

遺伝子改変などの新技術は、画期的ではあるが生物や人の生活のありようを根本から変えるリスクをもつため、「何に対して使用するか」「どこまで使用してよいか」を事前に入念に検討する必要がある。本研究の目的は、こうした新技術の使用のあり方に関する意思決定メソッドを構築し、モデルとなるグランドデザインを提案することとした。

具体的には、新技術の事例として近年研究が著しく進展しているゲノム編集を例に取り上げ、「基本的考え方」を設定し、関係者が採るべき具体的方策を「ハードウェア」「ソフトウェア」「ハートウェア」の3つの観点から検討し、これらの検討結果をもとに、「グランドデザイン」(モデル案)を設計し提案することを目指した。これらの実現に向け、本助成金を得て、以下3点を実施することができた。

### 研究成果

#### ① 国内先行事例及び海外動向の調査

ゲノム編集に関する科学・技術政策立案の際の市民参画(Public Engagement)の先行実践例として、国内における新技術の社会的受容に関する議論、政策策定過程等について、先行文献や事例を精査し基礎資料を得た。また、これまでに交流のあった英国、韓国の研究者らが主催する研究会へ参加し、実証的生命倫理学(Empirical Bioethics)に関する実践的な取り組み事例や方法を体験し、今後の研究実施に資する知識を得ることができ、研究実施につながるネットワークを構築することができた。

#### ② 国際フォーラムにおける発表

生命倫理研究に関する国際フォーラム(Global Forum on Bioethics in Research)の2019年度のメインテーマが「ゲノム編集」と設定され、口頭発表の公募があったことからこれに応募し、選考を経て発表の機会を得ることができた。本研究で検討してきた内容について発表し、参加者から意見を得たり、2日間の開催期間中に行われたグループディスカッション時に多様な価値観に触れたりすることができ、検討を深める貴重な機会となった。

#### ③ 小冊子「ゲノム編集ってなんだ」の作成

市民向けの小冊子「ゲノム編集ってなんだ(仮)」の構想を練り、執筆を進めた。完成には至っていないが、上記①、②で得た情報・知識・ネットワークを踏まえ、よりよい形にできるよう検討と執筆を継続した。

### 今後の見通し

本研究から得られた成果をもとに、次年度は「グランドデザイン」(モデル案)の設計まで実現を目指す。具体的には、前述③の小冊子を含め、市民との対話に用いるツール類について、

「科学教材」という位置づけで捉えなおし、2020年度の科学研究費補助金への応募を試み採択できたことから、本研究で検討した内容を発展させる形で実現させる予定である。また、前述②の「生命倫理研究に関する国際フォーラム」での発表内容をもとに、フォーラム参加者4名による共著で論文執筆の計画が挙がり、現在執筆中であり、学術論文としての公表へもつなげる予定である。

## 謝辞

翌年度の科研費獲得へつなげることができたのは、本助成金による研究継続あつてのことと実感している。また、申請当初は予定していなかった国際フォーラムへの参加を実現することができ、想定していなかった発展ができた点も、この助成金がなくてはなしえなかったものである。改めて、心より御礼を申し上げたい。